

---

# あなたにメリークリスマス～俺達私達の未来予想図～

玉紀 直

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あなたにメリークリスマス〜俺達私達の未来予想図〜

### 【Nコード】

N6538F

### 【作者名】

玉紀 直

### 【あらすじ】

学と美春は、幼馴染同士の中学3年生。お互い相手の事が好きなのに、その想いは通じ合わないまま、意地を張り続ける関係。そんな2人が、初雪舞い落ちるクリスマスの夜、語り合った未来予想図とは……。 「理想の恋愛完璧な愛」の2人が、中学3年生の時のお話です。通じそうで、通じない。言いたいのに、言えない。そんなじれったい2人を、どうぞ……。

\*\*\*\*\*

「くしゅんっ!」

子犬のようなくしゃみをひとつ。

「・・・く・・・くしゅん!」

ふたつ。

「くしゅっ!」

みっつ。

「美春」

さすがに、横にいる人間に3回も連続してくしゃみをされると、嫌でも声を掛けてしまおうと言う物だろう。

もっとも、今、くしゃみを3回連続で披露した少女に声をかけた少年に至っては、「嫌でも」ではない。

1回目の時から「どうした?」と心配になっていた。しかし、

「お前、くしゃみは可愛いな」

思わず出る。憎まれ口。

「うるさいっ・・・バカ・・・は・・・くしゅんっ!」

襲い来るくしゃみの猛攻に抗いつつ、少年に反撃を仕掛ける少女。よつつ目のくしゃみ。

「くしゅんっ!」

いっつめ。

「おい!本当に大丈夫か?」

少年の心の中で「心配」はマックスに達し、とっとうっ心配そうな声が思い切り出た。

「ウチの車呼ぶっていつてんに。何を遠慮してんだよ。お前は」  
少年、葉山学は、誰が聞いても解るくらいに不服そうな声を出して、今隣に並んで歩いている少女、光野美春に目をやった。

「いいのよ。歩きたかったのっ」

寒気がするのだろう。ちよつと声が震えている。制服の上に羽織った、暖かそうなアイボリーのオーバーコートの襟元を両手で押さえて、肩をすくめながら歩く。

あまりのくしゃみに驚いて保健室で熱を計ると、37度8分。

本人は、大丈夫だ、と言ったが、学が「帰って寝ろ！」と、保護者のように怒鳴った。

大企業の御曹司である学が「家の車を呼ぶ」と言ったのだが、何故か美春は「歩いて帰る！」と突っぱねたのだ。

2人は幼馴染で家も隣同士。なので、必然的に学が送っていくことになった。・・・と、いうより、他の人間に美春を送らせるなど、学が承諾する訳がない。

「こんな時期に風邪なんかひきやがって」

好きでひいたんじゃないわよ！そう言い返そうとした美春の首にフワツと、柔らかく暖かいマフラーが掛けられた。

「首元、暖めとけ」

学が、自分が首から提げていたマフラーを、美春の頭から首に大きく回してクルクルつと巻いた。

そして、につこりと笑う。誰もが見とれてしまうような笑顔。

学は大人っぽい綺麗な顔付きをしている。長年幼馴染をやっている美春が見ても、たまにドキツとしてしまうくらい。

彼女の場合、ドキツとする理由はそれだけではないが・・・。

「学、こんな良いマフラー、今私に貸したら、鼻水つけちゃうよ。

冗談半分な言葉に、学も冗談半分で返す。

「いいぜー。美春のだったら違ってもんでも大歓迎。俺、一生洗わねえー」

「・・・変態か、あんたは・・・」

美春は、貸してもらったバーバリーチェックのカシミア製マフラーを、鼻の上まで引き上げて顔を隠した。

・・・ちよつと、嬉しい。マフラーから学の匂いがした。顔が赤くなつていくのが自分でも分かる

2人は2歳のときに出会い、中学3年の今までずっと幼馴染という関係を続けている。

そして美春は、その時からずっと学の事が好きだ。

今日、学が車を呼んでくれると言った時から、学が送ってくれるのが分かっていた美春は、こうして学と歩いて帰りたいが為にそれを断つたのだ。

車だと・・・すぐ家に着いちやうもん・・・。

美春はチラツと、横を歩く学を見上げた。

カメラのオーバーコートえりの襟を立てて、正面を見ている横顔。

12月の空気に触れた息が、白くなって吐き出される。

学、まつげ長いなあ・・・。男のクセに、綺麗な横顔・・・。

つい、ジーンと見ていると、視線に気付いた学が美春を見下ろした。

「何、見惚れてんの？」

「みっ、みとれてなんかいないわよっつ。自信過剰よっ、学っつ」

この慌あわて振りが見惚れていた事を立証する。美春が真っ赤になつて顔を逸そらすと、学がクスツと笑った。

「俺はよく、美春に見惚れるけどな」

「え？」

ドキツ・・・。赤い顔が更に赤くなる気がした。

「お前んトコに遊びに行つて、たまーに机でうたた寝なんかしてる  
とサイコーだよな。このまま襲つちやおうかな。とか思うよな」

「あほっ！」

こつこつ時、いつもなら手が飛ぶのだが、さすがに今日はその力が  
ない。

熱、上がったのかな。

小さく息を吐いておでこに手をやると、学が立ち止まりその手を  
つかんだ。

「何？」

美春が聞くのと同時に、学の額ひたいが美春の額ひたいにくつつく。

顔が近付いて、更に美春はドキツとした。

「熱。上がったんじゃないか？」

額をくつつけたまま、学が小声で言う。

冷たい額が気持ちいい。美春は思わず目を閉じた。

その可愛らしい表情に、今度は学がドキツとする。

美春が学の事を好きなら、学だって美春の事が大好きだ。

ハッキリ言つて、ひとつめのくしゃみをした時から心配で心配で  
堪たまらない。

「明日、終業式なのに・・・」

美春は色が白い。ちよつと風邪で青ざめたところに、熱のせいで  
赤く染まつた頬。閉じられた瞳に、息苦しさ半分開いた唇。

思春期の少年の目にはいささか目の毒なその表情から無理矢理目  
を逸らして、学は美春から額を離れた。

「24日、行けないかも・・・」

美春が残念そうに呟く。

毎年クリスマススイブは、仲の良い友人知人を集めて、学の家でク  
リスマスパティーをする。

毎年の恒例行事だが、小学1年の時からそれは続いている。

じつはそれも、クリスマススイブに堂々と長時間、美春と一緒にい  
たい、という学の思惑おもむくから始まつているのだが・・・。

ハッキリ言えばこの2人。両思い、というやつなのだが、どちら  
とも意地を張つてそれを言わない。

「とにかく、かえつて寝ろよ・・・」

学は優しい声でそう言つて、美春の綺麗な栗色の髪をなでた。

\*\*\*\*\*

「だからー、酷いと思わねー？クリスマスだぜ、クリスマス。その朝にいきなり電話で「別れましょ」って。・・・何の話だったっの！」

はいはい、分かった、分かった。

「何も、今日じゃなくてもいいと思わねえー？なあ、葉山。聞いてる？」

はいはい、聞いてる、聞いてる。

「別れるって言ってる向こうはいいけどよお。こっちはどうなるんだよ。クリスマスに好きな女と居られないって、どういう事？だから、葉山っ。聞いてる？」

「田島っ」

学は、さつきから泣き言の力説を繰り返す友人の田島信を、一喝する様に軽く睨んだ。

「だからお前。年上と付き合つ<sup>ゃ</sup>の止める、って、俺が言っただろ」

「そんな事言つてもよ・・・向こうが・・・」

「俺達くらいじゃな、年上と付き合つたってガキ扱いしかされないんだよ。だから、大抵お前みたいに振り回されて終わるんの。俺みたいにうまく扱<sup>う</sup>自信が無いなら、もう年上は止めるっ」

学がいささか冷たくそう言つと、田島は勢いよくソファから立ち上がり、クリスマスパーティーで盛り上がっている友人知人達の方を振り向くと、右手を上げて叫んだ。

「はいっ！田島信、クリスマスに誓いますっ！高校に行ったら、同じ年の彼女しか作りません！！」

部屋中から冷やかしの歓声と拍手が起こる。

「田島ちゃん、脱年上?!」

「がんばれよー!」

どう聞いても、応援じゃねーな……。そう思いながら、学がソファから離れる。

「誰か。田島パス」

「まかせとけ」とばかりに、数人が田島の愚痴ぐちの聞き役に回った。ヤケ気味になっていいる田島を見ながら、学は小さく溜息ためいきをついた。あいつ、優しいからな……。年上にひっかかんのも無理ないんだけど……。

「クリスマスに好きな女と居られないって、どーいうこと?」バ  
ーカ。俺も同じだったっの。

学は、毎年恒例のクリスマスパーティーで盛り上がる面々を、隅すみから隅すみまで眺めた。……。そこに、美春の姿は無い。

あの日、夜から高熱が出た。結局、終業式も欠席だった。今日も、まだ熱があるから、という事で、断りの電話ことわが母親から入ったのだ。窓辺に飾られた大きなクリスマスツリー。学は横に立ってそれを見上げた。

毎年、午前中から美春が来て綺麗に飾り付けをしてくれていた。

この日は、午前中からパーティーが終わる夜まで、一日中美春と居られる。一年中で、学が楽しみにしている日のひとつだった。

……。あー、さいあく……。

大きな溜息が出る。

友達が沢山集まっているところで「最悪」というのも失礼な話  
だが、学にとって美春は、何よりも優先されるべき人間だ。はつきり言っ  
て、今日美春が来られないと知った時、パーティーを中止してやろうかと思っ  
たくらいだ。

「美春に、会いてーなあ……」

ツリーを見ながら呟いた。

「……」

そうだよな。クリスマスに、好きな女に会えない、って話しは無

いよな……。

\*\*\*\*4\*\*\*\*

「37度2分……」

美春は電子体温計を眺めながら溜息をついた。  
まあまあ熱は下がったが、まだ体がだるい。

「こんな時に熱出すなんて……」  
私のバカ……。

せつかく、一日中、学と居られる日なのに……。  
ベッドの上に腰掛けて、体温計をサイドテーブルに置く。

毎年午前中から葉山家へ行つて、ツリーの飾り付けをしていた。  
パーティーが終わった後も、お隣さんの気軽さでそのまま居て、  
2〜3時間は2人で盛り上がる。

本当に一日中、学と居られる日。もちろん美春にとっても1年中  
で楽しみにしている日のひとつだ。

美春は壁側のサイドボードの上に飾ってある、ファイバーツリー  
の光を眺めた。

体調が良くないせいとか、心の体調(?)まで宜しくない。訳も無  
く涙が出そうになった。

いや。訳なら有る。

「学に、あいたいな……」

この素直さが普段の時もあれば、2人の関係に少しくらい進展が  
あるのでは?と思うが、ただでさえ意地っ張りな年頃に加えて、幼  
馴染という現実も手伝い、素直な自分になかなかないというの  
が現状だ。

カタン……カタ……カタン……。

しみりしている美春の耳に、「その音」は、あまりにもハッキリ

リと聞こえた。まるで、それを待っていたかのように、美春の耳はハッキリとその音を聞き取る。

カタン・・・ストン!

まさか・・・。だって、今は・・・。

美春は、「まさか」という気持ちで部屋の大きなベランダ窓へ早足で歩いていくと、勢いよくカーテンを開いた。

そして、そこに・・・。

「よお。美春」

美春の想い人が、窓の外で片手を上げて微笑んだ。

\*\*\*\*\*

「な・・・何やってんのよ学っつ!!」

美春は驚いて、慌てて窓を開けた。

「パーティーは？皆来てるんでしょ？」

「んー、でも、みんな勝手に盛り上がってるから、抜けて来た」

6畳はあろうかという広いベランダ。学はいつも美春の家の塀に登り、このベランダから美春の部屋へ遊びに来る。

小さな頃からそれは続けられ、いつも出入りはベランダから。

玄関から来る事など、年に2〜3回・・・いや、それ以下かもしれない。

そのせいか、美春には学が塀に登り始めると聞こえる音で、学が来たことがすぐ解る。

今も音ですぐ解った。だが、今はクリスマスパーティーの最中だ。さいちゅう  
「まさか？」という気持ちの方が大きかった。

「熱は？」

ベランダで靴と上着を脱いで部屋の中へ入ると、窓を閉めるより先に、学は美春の額ひたいに手を当てた。

学の冷たい手が、学が現れたことで、少し上がった微熱の有る顔の熱さを冷やす。

その心地よさに、美春の表情が安らいだ。

「37度2分だから、大丈夫」

それを聞いて、学が優しく笑う。

「じゃあ、大丈夫だな」

「うん・・・」

額に当てられていた手は、美春の両頬を包んだ。

「学・・・手、つめた・・・」

「塀登ってきたからな。冷たかったぞ」

「でも、きもちい・・・」

美春は両手で、自分の頬に当てられた学の両手を押さえ、目を閉じた。

その表情を見て、学がドキツとする。

「・・・本当に可愛いな・・・美春・・・」

自分の手のひらから、手の甲から、美春の頬の熱さ。手の熱さが伝わってくる。

学の手は、簡単に美春の小さな顔を包み込み、手のひらには口元からもれる微かな熱い息が吹きかかった。

このまま、美春に触れていたい・・・。

「もう。クリスマスに熱なんて出すなよ」

学がそう言うと、美春は目を開けて学を見た。

「クリスマスに、美春が居ないなんて・・・俺、嫌だからな・・・」

「学？」

今度は、美春がドキツとした。

学が凄く真剣な顔をして自分を見ている。

と、思った途端、学はイジワルな顔で、にっと笑った。

「毎年恒例、アルコール分0.2パーセントのお子様シャンパンを、騙されて飲んで倒れる奴がいなかったら、つまんねーだろ」

パンツ！！美春は自分の頬にある学の両手を、思い切り叩いた。

「いつてー・・・なあ・・・」

学は美春から手を離すと、今叩かれた両手を振った。

「ん、もう！学は何しに来たのよお！病み上がりの人間、怒らせにきたわけえ？」

ドキツとさせられた分、損した。とばかりに美春が怒る。

学は手を振りながらファイバーツリーのほうへ歩いていった。

「美春に会いに来たんだよ」

サイドボードに手を置き、ツリーの前で、ちよつと美春を振り返る。

「・・・お前が居ないとつまんない。つて、言つたる」

\*\*\*6\*\*\*

クリスマスくらい・・・。少し素直になっても良いだろ・・・？

学は美春を見ながらそう思った。

「会いたかった」のも「つまらない」のも、本心だ。

俺はいつでも、美春が居ないと、つまらない・・・。

美春は、自分をチラツと振り返ってみている学から、目を離せないでいた。

「なーんてな」いつも通り、そう言つて笑うのだろう。そう思つていた。

なのに学は、ただ黙つて自分を見ている。

学・・・、言つてよ。「なーんてな」つて、言つてよ。冗談みたいに笑つてよ。じゃないと、胸がドキドキして苦しいよ・・・。また熱があがつちゃう・・・。

「美春」

学の真剣な静かな声。美春は心臓が止まりそうなほどドキツとした。

と、学の長い人差し指が、カーテンが開きっぱなしの窓の外を指差した。

美春がその指先を追って、窓の外に目を向ける。

そして・・・

「あっ！」

思わず声が上がった。

「雪だ・・・」

窓の外を、静かに白い雪が舞い降りてきていた・・・。

\*\*\*7\*\*\*

「うわあ、雪だあ」

美春は窓の外の雪を眺めながら、窓を開けようとした。しかし、その手を素早く学がつかむ。

「駄目だ！病み上がりで外の風になんて当たったら、また熱が出るぞ！」

「でもお。初雪だよ」

「「初」でも「次」でも駄目だ」

「・・・」

美春は拗ねた様子に、上目使いに学を見る。

そして30秒後・・・。

・・・学は窓を開けた。

「少しだけだぞ」

学は美春のこの顔に弱い。その事を美春が解っているかいないかは謎だが、おそらく無意識の行動だろう。

美春はにっこりと笑って、窓からベランダへ出た。

「うわあ・・・」

嬉しそうな歓声。

フワフワとした白い雪が、まるで花びらのように舞い踊る。

「ホワイトクリスマス・・・ってやつだな」

パサツ。自分が着て来ていた黒のジャンパーを美春の肩から掛けると、学は美春の横を通ってベランダの柵に肘を付いた。

「学、着てなきや、風邪ひくよ・・・」

美春が学の横に立つ。心配そうに声をかけて来た美春の頭を、学はポンポンと撫でた。

「大丈夫だよ・・・お前のほうが心配だ」

その優しい言葉に、また顔が上気してくるのを感じ、美春は顔を逸らしてベランダの上に手を置いた。

空を見上げる。

星も、月も、無い空。

ただ、白い雪だけが、舞い降りてくる。

「中学最後のクリスマスだね」

美春が空を見上げながらそう言うと、学も空を見上げた。

「クリスマスは来年もまた来るさ。高校になって、大学になって、社会人になっても」

「その時、私たち、何やってるんだらうね・・・」  
「ん？」

「高校になって、大学になって、社会人になって・・・10年後くらい。私たち、何をやってるんだらう・・・」

\*\*\*\*\*

白い雪が、舞い落ちる。

並び佇む、二人を包むように……。

「10年後って……25歳か……」

美春の何気ない問いに、学は、空から落ちる雪を見ながら呟いた。

10年後……俺は、何やってるんだろっ……。

「まあ、間違いないのは、俺は親父の会社で働いてるって事だと思っけど」

「会社の跡取りだもんね。学は。きっと頑張ってるんだろっね」

「お前は？」

「ん？」

「美春は、何やってんだろっな？」

10年後……私は、何をやってるんだろっ……。

「何だろっ？どっかでOLでもやってるかな……。あ、でも、25歳でしょ？適齢期って奴？お嫁さんにも行ってるかなあ？」

「誰の！」

いきなり学が大きな声を出して、美春を見た。

美春が驚いて学の顔を見ると、心なしか、少々怒っているような表情をしている。

「し……知らない……」

なんもん分かるわけないじゃない！何怒った顔してんのよお！！

お、思わず、取り乱してしまった……。

学は驚いた顔で自分を見ている美春を目の前に、必要以上に取り乱してしまった自分に気付いた。

……だつてよ……いきなり、嫁に行ってるかも、なんて言うから……。

「誰の、なんて、わかる訳ないでしょ！私が聞きたいわよっっ」

「……そっだよな」

「でもなあ、まだまだお嫁にも行かないで、仕事一筋！とか言ったらどうしよう」

「弱気じゃん」

「だって私、可愛くないしさ。誰が貰もらってくれんよ」

お前ん家に鏡は無いのか！鏡はあ！！

そういう台詞を、あんまり人前で平気で言うなよ！

ハッキリ言っつて、お前くらいのかなり可愛い女がそういう事を言っつと、かなり嫌味だからな！！

まあ、自分の事が良くわかってないから、しょうがないんだけど・・・。

「・・・俺のトコ、こいよ」

「ん？」

「誰も貰もらってくれなかつたら、俺のトコこいよ」

「いやよ」

美春は速攻そくこうで答えた。

「学となんて結婚したら、毎日浮気で悩まされるわよ。私、そーゆー苦労イヤだもん」

「おい、そんなの解と解とないぞ。俺、意外に一人に決めたら一筋かもしんねーだろ」

「・・・なにバカ言っつてんのよ」

「俺のトコこいよ」冗談で言っつてるのは解と解とってる。

でも、すっごいドキッとした。赤くなつたのを気付かれるのが恥ずかしくて、だからすぐ「イヤ」って言った。

「・・・早く、「なーんてな」って、いつもからかう時みたいに言っつてよ。」

「学なんて、会社の為ために取引先のお嬢さんとかと政略結婚して、そのまま一生終わるわよ。きつと」

「ひでー。・・・つまんねーな、それ・・・」

「何よ？生意気に恋愛結婚とかしようとか思っつてんの？」

「思ってる」

そう言いながら美春の顔をジッと見る学の目は、どこか優しい。

美春はさつきからドキドキが止まらない。

「無理よきつと。学、お坊っちゃんだもん。そういう人って、親が決めた人と結婚する物なんでしょ？」

いつの時代の話だよ……。

学は少々、呆れたように美春を見た。

美春はいつの間にか表情に元気が無い。白い頬がピンク色に染まっていた。

熱でも上がってきたのではないかと思った学は、美春の背中に手を当てた。

「美春。中に入ろう。熱、また出たら……」

「ね、学」

美春が学から目を逸らして、下を向く。

「もし、10年後に、学が結婚とかしててもさ、私と、幼馴染続けてくれる……?」

「……」

学は美春の背から手を離すと、下を向いたままの美春の栗色の髪を眺めながら、静かに言った。

「いやだ」

微かに美春がピクツと震える。

「結婚してんのに、幼馴染なんて、いやだ」

俺が決めてる女はお前なのに。

いつまでも幼馴染で居る気なんて……。

俺は、ないからな……。

泣きそう……。

「そう……だよね……」

そんな、速攻で「いやだ」なんて言わなくても良いじゃないの。

そりゃ、わたしもさつき「いやよ」って言ったけど……。  
「いくら幼馴染でも、旦那さんの近くに違う女が居たら、奥さんだ  
ってイヤだもんね」

いつかは学と、こうして気軽に会えなくなるんだらうか……。  
学とバカみたいに笑いながら、一緒に居られなくなるんだらうか  
……。

……大人になったら、私と学には、別々の世界が待ってるんだ  
らうか……。

そんなの、ヤダ……。

学と別々になるなんて、私、いやだ……。

白い雪が、舞い落ちる。

向かい合う2人を、包むように……。

\*\*\*\*\*

学はフーッと白い息を吐いて、空を見上げた。

でも今、そんな事、言う訳にもいかないしな……。

「美春」

学は、下を向いたままの美春の両頬に手をやると、優しく顔を上  
げさせた。

美春が、泣きそうな顔をしている。

俺は、好きな女、泣かしちゃいけないんだ……。

「大丈夫。ずっと、一緒に居られるさ……」  
ずっと……。ずっと……。

「10年たってても、20年たってても、何年たってても……。変わら  
ないで。ずっと」

「ずっと……隣に住んでたりしてね……」  
美春がちよっと寂しさびそうに笑う。学はそんな美春をただ黙って見詰めていた。

幼い頃から想い続ける。最愛の少女を。

「大丈夫だよ。美春はきつと、10年も経ったら嫁に行ってるよ」  
10年も経てば……。

「きつと結婚して、子供の一人くらい居るかも知らないぞ」  
俺はもつと、男として、大きくなって見せるから……。

「何言ってるのよ、わかんないでしょ。そんなの……」

「解るさ。「俺」が、言ってるんだ」

「自陣過剰……」

だから、美春……。

「俺が言ったことは、間違いないんだっ」  
俺を、待ってて……。

美春は、包まれた頬が熱くなっていくのを感じた。

目の前の学から顔を逸らしたいが、学が顔を押しさえているのでそれが出来ない。

「じゃあ、そう思ってあげるよ」

でもそれは、学を忘れられたら、の話し。

「本当に間違いないならね」

学を好きな気持ちを、忘れられたら。の話し。

美春は、大きく綺麗な目を潤うるませながら学を見る。

幼い頃から想い続ける、最愛の少年を。

「学も、優しい綺麗な奥さん、恋愛で見つけられるよ」

10年経ったら……。

「結婚して、幸せで、仕事も順調で・・・」

学はきつと、もつともつと、大きく、素敵になつてる・・・。

「本当に、そう思ってくれてんの？」

「そうよ。アンタの事なら何でも知ってる「私」が言つてんのよ」

「本当に、「何でも」知つてる？」

だから、学・・・。

「・・・どうかな・・・」

私は、あなたへの想いを、断ち切る勇氣は無い。

10年経つても・・・。

20年経つても・・・。

何年経つても。

きつと私は、

きつと俺は、

ずっと・・・

あなたが好き・・・。

お前だけ愛してる・・・。

白い雪が、舞い落ちる。

二人を包むように。

ふわっ。

美春の体が温かくなる。

「・・・」

ふわっ・・・と。

学は美春の体を包むように、自分の腕を回した。

「美春・・・」

「言っの、忘れてた」

学の腕が、自分を包んでいる。

美春はドキドキした胸の鼓動こどうを抑えられず、その音を聞かれないようにするために、口を開いた。

「何？」

上から、学の優しい声が聞こえる。

美春はこの声が大好きだ。

「メリークリスマス。学」

恥ずかしそうな美春の音が、腕の中から聞こえた。

本当なら、動けなくなるくらい抱きしめてしまいたい。

でも今は、それが出来ない。

2人はまだ、幼馴染だから・・・。

「美春・・・」

学は、じれったくて、切なくて、齒痒はがゆい気持ちを隠すように、口を開いた。

「何？」

可愛い美春の声。

学はこの声が大好きだ。

「メリークリスマス。美春」

メリークリスマス・・・

来年も、再来年も・・・

そして、いつか・・・2人で・・・

\*\*\*\*\*

「はつくしよん！」

あまりくしゃみをしないう人間がくしゃみをする、1回で意外と気になる。

「どしたの学。風邪ひいた？」

美春がケーキを食べながら、心配げに訊いた。

何と言っても昨日、しばらく2人で外に立っていた。美春はジャンパーを貸してもらっていたが、学はシャツの上にベスト一枚だったのだ。

25日の昼下がり。昨日のパーティーで残った、ケーキやお菓子やらを美春の部屋に持ち込んで、二人でプチパーティーの真<sup>ま</sup>中<sup>ちゆう</sup>だ。

「んー、ちょっと、ひいたかも・・・」

そう言っ、持ち込んだアルコール入りのシャンパンをグラスに注<sup>そそ</sup>ぐ。

「昼間っから何飲んでんの！よっぱらいっ！」

「体あつたまるからいいだろ。いいじゃん。俺、酔わねーし。だいたい、誰のせいで風邪気味になったと思っただよ」

確かに、自分に付き合っずと外に居た。そう思っ、美春は文句が言えない。

学はちよつと考えてにやつとした。

「そうだよなー。美春のせいで風邪気味になったんだから、この風邪、半分もらえよ。お前治ったんだろ？」

「何よそれ！だいたい、どうやってもらうのよ！」

フォークに刺したケーキのイチゴを食べようと口を開けかけた時、学がそのフォークを取っ、グツと顔を近づけた。

「ほら。キスしたらウツル、って、言っじゃない」  
「あほっ！イチゴかえせっ！」

10年経っても。

20年経っても。

きつと一生。

あなたに、

お前に、

メリークリスマス。

END

(後書き)

こんにちは。玉紀 直です。

今回初めて玉紀の作品を読んでくださった方、はじめまして。読んだ事があるという方、今回も有難うございます。

クリスマス物は、やっぱり「恋愛小説」を書いてる上では外せません！

読んで下さったほとんどの方が知っていると思うのですが、学君と美春ちゃんは、別連載の主人公達です。

連載中で番外編を入れる訳にもいかず、単品での発表となりました。

しかし、まー、じれったくてじれったくて、書いてるこっちがワキワキ(?)しました。

2人が結ばれるのは、高校3年なので……  
今手出しさせる訳にも行かず……。

うーん……。

「あなたにメリークリスマス〜俺達私達の未来予想図〜」  
如何でしたでしょうか？

少しでもお気に召して頂けたら嬉しいです。

ではまた、何かの作品であなたとお会いできますように。  
読んで頂いて、本当に有難うございました。

感謝をこめて。

玉紀 直

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6538f/>

---

あなたにメリークリスマス～俺達私達の未来予想図～

2010年10月8日14時11分発行